

個体化の原理に潜む二つの側面：

トマス・アクィナスによる個体化理論の基礎

石田 隆太

一 はじめに

個体化の原理に関する哲学史研究において、個体化の原理は何であるかという問いは、どのような候補（例えば質料や形相）を個体化の原理として挙げるべきかという問いとして通常は理解される⁽¹⁾。この問い方に従うと、そもそも個体化の原理という概念そのものが何であるかという問いは後景に退いてしまう。実際、個体化の原理に関する先行研究においては、個体化の原理という概念そのものが何であるのかという点に関して、考察の開始段階に何らかの答えを既に与えてしまう傾向が見られる⁽²⁾。それに対して本論では、13世紀のスコラ哲学者トマス・アクィナスを例にして、個体化の原理という概念そのものがどのように説明されているのかを概観することで、個体化の原理という概念そのものが何であるかという問いを前景化させることを試みる。このことにより、個体化の原理に関する哲学史研究に貢献することが最終的な目的である。

第一に、『命題集』註解』で用いられている「個体化の原因」と「個体化の理拠」という区別を導入する。この区別は、質料的な事物における個体化の原理の二面性を論じる出発点になるものである。第二に、質料的な事物における「個体化の理拠」についてトマスが最も詳しい論述を展開している『ボエティウス「三位一体について」註解』の第4問題第2項という箇所を参照する。そこからは、「次元」ないし「次元量」という量の附帯性に属するものが個体化の理拠を担う主要な役割を果たしていることがわかる。第三に、聖体変化に関する議論を参照する。まず『命題集』註解』に着目して、個体化の原理の二面性が「個体化の第一の原理」と「個体化の二次的な原理」の区別として論じられていることを示す。次に『神学大全』に着目して、個体化の原理の二面性という点と、個体化における次元および次元量が担う特殊な役割が論じられていることを確認する。以上により、質料的な事物における個体化の原理にはどのような二面性があるのかが明らかになるだろう。

二 「個体化の原因」と「個体化の理拠」

トマスの初期著作であり最初に書かれた体系的な著作でもある『「命題集」註解』の第1巻では、質料的な事物において個体化に二つの側面があることが次のように明示されている。

個体化において、複合された諸事物においてあるということに即しては、二つのことを考察することができる。すなわち第一は、個体化の原因 (*causa individuationis*) ——それは質料である——のことであり、こうしたことに即しては、個体化は神に関することごとに対して転用されない。そして第二はすなわち、個体化の理拠 (*ratio individuationis*) ——それは共通化不可能性 (*incommunicabilitas*) の理拠である——のことである。つまりは、或る同一のものが複数のものにおいて分割されず、複数のものについて述定もされず、[それ自体でそれ以上] 分割されえないものであるということに依拠したことである。そしてその場合、個体化は神に適合する。それゆえ、リカルドゥスも『三位一体について』第2巻 [第12章 col. 907] で、個の代わりに共通化不可能ということを描定した⁽³⁾。

この引用箇所は、ボエティウスによる「理性的本性の個の実体」(*rationalis naturae individua substantia*) というペルソナの定義が適したものであるかどうかが問われている文脈の中にある⁽⁴⁾。上記の引用箇所はトマスによる異論解答の一つにおいて展開されている議論であるが、対応する異論は次の通りである。まず、個体化の原理は質料である。ところで、ペルソナは質料に全く関わらない神にも見出される。それゆえ、質料との関わりが前提される個という概念がペルソナに適用されるべきではない⁽⁵⁾。

この異論に対するトマスの解答は、個体化の原理は質料であるという点に関わるものである。解答では、質料と形相からなる複合された事物を念頭に置いた上で、「個体化の原因」と「個体化の理拠」が区別されている。その場合に、質料は個体化の原因と言われるのに対して、共通化不可能性の理拠が個体化の理拠と言われ、個体化の理拠だけは神においても見出すことができる。また、共通化不可能であるということは、ここでは少なくとも、神にも適用できるような個という概念のことを意味していると考えることができる。主としてペルソナに関する議論において「共通化不可能」(*incommunicabilis*) という概念が用いられる歴史的背景には、引用文でも

言及されているように、サン＝ヴィクトルのリカルドゥスによるペルソナの定義が念頭に置かれていることも指摘しておこう⁽⁶⁾。

いずれにせよ重要なのは、異論では単に個体化の原理は質料であると言われていたことに対してトマスは、質料が個体化の原理であるとはそもそもどういうことであるのかについて思考を巡らせていたということである。この引用箇所に従う限り、質料は厳密に言えば個体化の原因と言うべきであって、それとは別に、個である限りのすべての個に適用できるような個体化の理拠が区別される。すなわち、個体化において個をまさに個たらしめているものを探るためには、この個体化の理拠によってトマスが何を言おうとしているのかを理解する必要がある。このようにして『命題集』註解の第1巻では、個体化の原因と個体化の理拠という二つの側面が質料的な事物の個体化にはあることが提示されている。

三 個体化における「次元」の役割

個体化の理拠という概念によって一体トマスは何を言おうとしているのか。このことを質料的な事物において探求するためには、量という附帯性に属する「次元」(dimensio)⁽⁷⁾ないし「次元量」(quantitas dimensiva)が質料的な事物の個体化においてどのような役割を果たしているかを理解する必要がある。本節ではこの点を論じることしよう。

1257年から1258年に書かれたとされる『ボエティウス「三位一体について」註解』第4問題第2項は、トマスが個体化について例外的にまとまった論述を残している箇所として知られる⁽⁸⁾。この箇所では、様々な附帯性の「多様性」(varietas)が附帯性の基体となっているものの数的な「相異性」(diversitas)の原因になっているのかどうか問題とされる⁽⁹⁾。これはボエティウスの『三位一体について』で、三人の人間が別々の場所に存在することによって区別できることを例にして、「諸附帯性の多様性が数において差異(differentia)をもたらす」⁽¹⁰⁾とされていることを改めて問題化したものである。ここでトマスは、数的な相異性の原因を説明するために、個体化の原理について説明するという手法を用いている⁽¹¹⁾。

この箇所の主文冒頭部では、「類に即した相異性は質料の相異性へと還元されるのに対して、種に即した相異性は形相の相異性へと還元されるが、数に即した相異性は、部分的には質料の相異性へと、部分的には附帯性の相異性へと還元される」⁽¹²⁾と述べられる。これは、「同じ」(idem)ということと「相異なる」(diversum)ということが類的、種的、数的な仕方で見出せ

るとポエティウスが『三位一体について』第1章で述べていることを踏まえている⁽¹³⁾。人間と馬は動物という点で類的に同じであり、カトーとキケローは人間という点で種的に同じであり、トゥッリウスとキケローは歴史的に実在したマルクス・トゥッリウス・キケローであるという点で数的に同じであるというのがポエティウスの挙げる例である。数に即した相異性がどのようにしてもたらされるのかという問題に対しては、質料と附帯性の両方に原因が求められていくことになる。

類に即した相異性および種に即した相異性がどのようにもたらされるのかを詳しく論じた後で、トマスは同一の種に属する複数の個体が数において異なっていることの説明に移行する。

一つの種の内にある諸々の個体の間では、相異性は次のような仕方で見られるべきである。すなわち、『形而上学』第7巻[第10章 1035b27-31]における哲学者[アリストテレス]に即しては、類と種の部分が質料と形相であるのと同様にして、個体の部分はこの質料およびこの形相である。それゆえ、質料ないし形相の相異性が絶対的な仕方では類ないし種における相異性をもたらすのと同様にして、この形相およびこの質料が数における相異性をもたらす⁽¹⁴⁾。

理性的動物である人間を例にして考えるなら、この引用箇所の内容は次のようになる。動物という類は身体という質料に由来し、理性的という種差は理性的魂という形相に由来する。さらに或る個人においては、特定の身体という個的な質料、すなわち「この質料」(haec materia)と、特定の理性的魂という個的な形相、すなわち「この形相」(haec forma)がその部分として見出される。それゆえ、まず普遍的に捉えられる限りでの質料(すなわち身体)および形相(すなわち理性的魂)が何であるかによって類や種が決定される。それと同様にして、個別的に捉えられる限りでの質料(すなわちこの身体)および形相(すなわちこの理性的魂)が特定されることによって数的に異なるものが特定される。

それでは、個的な質料および個的な形相はそもそもどのようにして特定されるのか。このことに対するトマスの説明は次のように続けられる。

いかなる形相も、それがそのようなものである限りでは、自分自身に基づいてこの形相であるのではない。[...] それゆえ、形相は、質料にお

いて受容されることによってこの形相になる。しかるに、質料はそれ自体では区別されていないのだから、区別されうるものであるということに即してのみ、受容された形相を質料が個体化するということがありうる。というのも、質料において受容されることによって形相が個体化されるのは、[他のものと] 区別され、ここと今へ限定されたこの質料において形相が受容される限りでのみだからである。他方で、質料が分割されうるものであるのはただ量 (quantitas) によってのみである。それゆえ、哲学者 [アリストテレス] は『自然学』第1巻 [第2章 185b16] で、量が除去されると実体は分割されえないまま残ることになると言う。そしてそれゆえ、質料は、諸次元の下にあるということに即して、この指示された質料として作出される⁽¹⁵⁾。

最初に提示されるのは、形相はそれ自体では個的なものではないがゆえに、個的なものになるためには質料に受容されることを必要とするという論理である⁽¹⁶⁾。さらに、質料もそれ自体では無規定であるがゆえに、形相を個体化するためには自らも個的な質料になるのでなければならない。質料が個的なものとして分割されるためには、附帯性である量が必要になる。それゆえ、質料が個的なものになるためには、「諸次元」(dimensiones) すなわち縦、横、高さという三方向への広がりの下にあるのでなければならない。前節での議論を踏まえるなら、諸次元の側に個体化の理拠が求められていると言うことができる。

それでは、諸次元はどのようにして個体化の理拠として機能していると言えるのだろうか。そのことを検証する前に、トマスが諸次元そのものに関して二つの分類を提示する箇所を予備的に見ておく必要がある。第一に、諸次元が「限界づけ」(terminatio) を蒙っている場合の諸次元についてトマスは説明している。その場合の諸次元は、限定された「尺度」(mensura) と「形」(figura) によって限界が決められているとトマスは言う。この箇所について解説しているポービックによる例を援用するなら、身長およそ 180cm、肩幅およそ 40cm、胸骨から背骨までがおおよそ 20cm という「寸法」(measure) と、V 型の運動体型で筋骨隆々な「体形」(figure) の男 A のことを想定することにしよう⁽¹⁷⁾。トマスによれば、このようにして特定の量によって限界づけられた諸次元は個体化の原理になることができない。例えば、時の経過を通じて A の寸法や体形が変わることは容易に予想される。だからといって寸法や体形が変わってしまった A が個体として別のものになってしまう

うという説明は不自然である。すなわち、限界づけられた諸次元という特定の量を個体化の原理にしてしまうと、その特定の量を持ったものの時空上の数的同一性が言えないことになってしまう⁽¹⁸⁾。このようにして、限界づけられた諸次元が個体化の原理であることが否定されている⁽¹⁹⁾。

第二に、トマスはアヴェロエスに由来する「限界づけられていない諸次元」(dimensiones interminatae) という概念を持ち出してくる。これは、第一質料に対して延長的な量を最初にもたらず附帯形相としてアヴェロエスが措定したものである。この概念は、物体性という実体形相が第一質料に最初に到来することを主張するアヴィセンナ説に対抗するためのものであった⁽²⁰⁾。トマスによれば、この限界づけられていない諸次元とは次元の本性においてのみ考察される限りで認められるようなものである。たしかに諸次元そのものは実際には何らかの限界づけなしにはありえないので、そのような特定がされていない本性的なレベルで捉えられる限りでの諸次元は量の類には不完全な仕方でも属することになる。それでもトマスは、まさにこのようにして本性的なレベルで捉えられる限りでの諸次元が個体化の原理としては正当に認められることを示唆している。すなわち、「こうした限界づけられていない諸次元に基づいて質料はこの指示された質料として作出され、かくして形相を個体化する」。限界づけられていない諸次元はそれ単独では不完全なものであるからこそ、質料と結びつくことで個体化の原理として機能するというのがトマスの論理である。このような個体化を経て、「同じ種における数に即した相異性が質料から原因される」と述べられることにより、時空上の数的同一性を説明できる原理としては、限界づけられていない諸次元の下にある質料がふさわしいということが結論になっている⁽²¹⁾。

ここに来てようやく、次元がどのようにして個体化の理拠として機能しているのかについて考える段階に辿り着いた。同項の第3異論では次のような議論が行われていた。まず、すべての附帯形相は、それ自体では多数のものにとって共通なものでありえ普遍なものである。ところで、そのような共通で普遍なものは個体化の原理になりえない。それゆえ、附帯性は個体化の原理にはなりえない。ところで、何らかのものは、個体化されている限りにおいて数に即して相異している。それゆえ、附帯性は数に即した相異の原理にもなりえない⁽²²⁾。論としては、附帯性が個体化の原理にはなりえないことを導くことによって、それが数に即した相異性の原理にもなりえないことを示すものである。問題になるのは、附帯性が個体化の原理にはなりえないかどうかという点をめぐって、そもそも何かが個体化の原理であるということ

はどういうことなのかである。

これに対するトマスの異論解答は次の通りである。

個の理拠の内には、それ自体では不分割であり、他のものどもからは最終的な分割によって分割されているということがある。ところで、量以外のいかなる附帯性も、分割の固有な理拠を自身では持たない。それゆえ、位置 (situs) が量の差異であることに応じて、諸次元は、限定された位置に即して自分自身で個体化の何らかの理拠を持つ。そしてその場合、次元は個体化の二通りの理拠を持つ。一つは基体に基づくものであり、他の任意の附帯性と同様でもある。もう一つは、位置を持つ限りにおいて、自分自身に基づくものである⁽²³⁾。

冒頭に個の本質的な規定が述べられている。同様のことは『命題集』注解』や『神学大全』でも言われている⁽²⁴⁾。この規定は、自分自身ではそれ以上分割されえないという自体的な規定と、他のものとは完全な仕方で分割されているという対他的な規定の組み合わせとして理解できる。次に、そのような分割をもたらす役割を、附帯性の中でも量だけが果たすことが前提された上で、量の差異である「位置」に即して諸次元が個体化の理拠を持っていることが結論づけられている。その際に、次元の持つ個体化の理拠としての性格が二つの側面から説明されている。一つは、基体との関係性を持っているという限りでのことである。これは、限界づけられていない諸次元がそれ単独では不完全なものであるにすぎず、それゆえ、そのような諸次元の下にある質料が個体化の原理としてはふさわしいという上述の論点と特に関係がある。すなわち、次元も附帯性である限りは何らか質料を持つ実体に附帯しなければならず、それは次元が個体化の理拠をもたらすものであっても適用されるべきことだということである。

それに対して、もう一つの側面が個体化の理拠としてはより重要な側面である。すなわち、次元は、量の差異である位置を持つ限りにおいて自分自身が個体化をもたらす根拠になっているということである。ここで強調すべきは、量という附帯性には「自分自身に基づく」(ex se ipsa) 個体化の理拠があるとトマスが考えていることである。すなわち、次元には「自体的に個体化する」(self-individuating) 機能が自らに備わっていると言える⁽²⁵⁾。無論のこと附帯性としての次元量は基体を必要とする。その限りで、次元と質料の両方が質料的事物の個体化にとって必要なことは明らかである。他方で、

既に見てきたように、質料もまた次元を通じて分割を蒙るのでなければ自らもまた個体化の原理たりえないのであった。『命題集』註解』での言葉遣いを用いるなら、質料は個体化の原因であり、個体化の理拠は次元の側に求められる。その理拠がまさに「自体的に個体化する」作用として『ポエティウス「三位一体について」註解』では説明されていたと言える。

四 聖体変化における次元量の特殊な役割

第2節で見たように、『命題集』註解』の第1巻では質料的な事物を対象にして、異論で個体化の原理と言われていたことに対して、個体化の原因と個体化の理拠という道具立てをトマスは提示していた。次に、第3節で見たように、質料的な事物における個体化の理拠を説明する際には次元量が重要な役割を果たしていた。

トマスは既に、『命題集』註解』の最終巻である第4巻でも、個体化の原理という概念そのものの複層性を示す中で、個体化における次元量の役割について論じていた。さらに、そこでは第1巻で個体化の原因と個体化の理拠とに区別されていたことが、個体化の原理そのものの区別として次のように提示されていると理解することができる。

個体化の第一の原理 (*primum individuationis principium*) は質料であり、その質料によって、実体形相であれ附帯形相であれ、そのような任意の形相に対して、現実態においてあることが獲得される。そして個体化の二次的な原理 (*secundarium principium individuationis*) は次元 (*dimensio*) である。なぜなら、次元に基づいて質料は「自らが」分割されるということを持するからである⁽²⁶⁾。

この引用箇所は、聖体変化において附帯性（具体的にはパンの形やワインの色）は果たして実体なしに（つまりパンとワインがキリストの肉となり血となる場合に）あると言えるのかどうか直接には問われている文脈の中にある⁽²⁷⁾。この引用箇所に対応する異論は次の通りである。まず、形相が質料によってのみ個体化されるのと同様に、附帯性は基体である実体によってのみ個体化される。ところで、パンやワインが持つ形や色といった諸附帯性はまさにそのようにして個体化されている。それゆえ、その諸附帯性は基体である実体なしにあるのではない⁽²⁸⁾。

ここで問題になるのは、附帯性は基体によってのみ個体化されるという一

般命題である。異論が想定している一般原則を言い換えるなら、実体形相にとって個体化の原理は質料である一方で、附帯形相にとって個体化の原理は基体（すなわち実体形相と質料からなる複合体された実体）であるということになる。異論に対してトマスが強調するのは、質料的な実体における限り、実体形相と附帯形相の両方にとって質料がまずは「個体化の第一の原理」であるということである。次に、次元という量の附帯性が「個体化の二次的な原理」であると言われている。前節で見たように、質料が分割されるということを経験が個体化の原理になるための要件とするならば、次元に基づいてはじめて質料は個体化の原理として機能することになる。

結局のところ、附帯形相にとって個体化の原理は、第一には質料であり、第二には次元であるというのがトマスの解答の主旨である。同じ『命題集』註解』の第1巻で用いられた言葉と考え合わせるなら、個体化の第一の原理である質料は個体化の原因として捉えられる一方で、個体化の二次的な原理である次元が個体化の理拠と関連している。無論のこと神を含む非質料的な事物においては、質料や次元はそもそも無縁のものである。それゆえ、非質料的な事物において個体化の理拠が実際には何によってもたらされるのかは別に考えなければならないだろう⁽²⁹⁾。だが、少なくとも質料的な事物における実体形相や附帯形相は、次元によって個体化の理拠を保持していることがここでも確認できる。

聖体変化を論じる中で個体化の原理が問題になるのは、晩年に書かれた『神学大全』第3部でも見られることである。聖体変化の際にパンとワインにおいて次元量が他の附帯性の基体であることを論じる中で、トマスは三つの理由を提示する⁽³⁰⁾。第一には、聖体変化においても、色などの附帯性を受け取るものとして何らか量的なものがあることは自明である。すなわち、パンやワインの実体がそれぞれキリストの肉と血に変化しても、パンやワインが持っていた色は変わらず存在しているので、色という附帯性を担ってくれる或る量的なものが基体としてあるはずだということである。

第二には、次元量が「質料の第一の態勢」(prima dispositio materiae) であるということが理由になっている。さらに、質料が「第一の基体」(primum subiectum) であることから、量以外の附帯性が次元量を介して質料と関係づけられることが導かれる。例としては、色という質の附帯性の第一の基体が次元量の一種である「表面」(superficies) であることが挙げられている。このようにして、聖体変化の前において既に次元量が他の附帯性と質料を媒介しているという役割が、聖体変化の後も次元量が他の附帯性にとって何ら

かの基盤として残り続けることの主要な理由になっている。

第三には、附帯性にとっては基体が個体化の原理でもあることが理由になっている。手始めに個であることの理拠が複数のものにおいてあることができないことだということが確認された上で、複数のものにおいてあることができないということには二つの側面があるとトマスは言う。一つは、或るもの（具体的には形相が想定されている）がそれ自体で他の何らかのものにおいてあるよう本性づけられていないという側面である。この側面によれば、天使や神といった質料との複合がないものの形相がそれ自体で個的なものであると言える。もう一つは、実体形相であれ附帯形相であれ、或る形相が何らかのものにおいてあるよう本性づけられているが、他の多くのものにおいてあるよう本性づけられているわけではないという側面である。例としては、特定の物体において受容されている特定の白さという附帯形相が挙げられている。

前者の側面から言えば、質料に受容されるような形相にとって個体化の原理は質料であることになる。なぜなら、そのような形相はそれ自体で任意の基体に受容されるよう本性づけられており、特定の質料に受容されることで形相自身も他のものにおいてはありえないものになるからである。他方で後者の側面から言えば、個体化の原理は次元量であることになる。その理由は次の通りである。まず、或るものがたった一つのものにおいてあるよう本性づけられているということ、つまりは或るものが個であるということのためには、その或るものがそれ自身では不分割であり他のすべてのものからは分割されているのでなければならない。ところで、分割は量という附帯性によって生じる。それゆえ、様々な形相が質料の様々な部分において分割されている状態を次元量が成立させている限りで、次元量そのものも何らかの意味で個体化の原理であることになる。このようにして次元量そのものに個体化の原理であることの理拠が認められることにより、次元量以外の附帯性にとっては次元量が個体化の原理になりうる事が導かれている。

五 おわりに

本論では、トマス・アクィナスの思想に即して、主に二つのことを論じてきた。一つは、質料的な事物における個体化の原理という概念には二面性が見られるということである。これは、「個体化の原因」と「個体化の理拠」との区別や、「個体化の第一の原理」と「個体化の二次的な原理」との区別として言及してきたことである。もう一つは、個体化の理拠や個体化の二次

的な原理として措定されている次元および次元量が個体化にとって非常に重要な役割を担っているということである。質料がそもそも個体化の原理として機能するためには、次元および次元量を介して質料が分割されることが必要とされる。このような分割をもたらすものが次元および次元量しかないという点で、これらは個体化にとって不可欠なものとする⁽³¹⁾。

本論全体によって示してきたことは、個体化の原理という概念そのものを複合的な概念として捉える可能性を排除してはならないということである。本論はトマス・アクィナスにのみ着目して議論を構築したので、ここでの議論が他の哲学者たちに対しても当てはまるかは十分に検討すべき課題である。しかしいづれにせよ、個体化の原理を「普遍が個体になるための必要十分条件」であるとか、「単一であることの原理」であるといったように理解するにしても⁽³²⁾、個体化の原理という概念に二つの側面が潜んでいる可能性を見逃してはならない。それと同時に、このような二つの側面を分析軸の一つとして保持することは、個体化の原理に関する哲学史を見直す契機にもなるだろう。

注

(1) 典型例としては、次の論文を挙げることができる：Gracia, J. J. E., “Introduction: The Problem of Individuation”, in *Individuation in Scholasticism: The Later Middle Ages and the Counter-Reformation, 1150-1650*, ed. J. J. E. Gracia, Albany: State University of New York Press, 1994, 1-20.

(2) Cf. Głowala, M., *Singleness: Self-Individuation and Its Rejection in the Scholastic Debate on Principles of Individuation*, Berlin - Boston: Walter de Gruyter, 2016, 1-2; Gracia, J. J. E., *Individuality: An Essay on the Foundations of Metaphysics*, Albany: State University of New York Press, 1988, 141.

(3) Thomas Aquinas, *Super Sent.*, I.25.1.1, ad 6. 一次文献からの引用文はすべて拙訳であり、[]は訳者による補いである。引用および参照を行ったトマスの著作の校訂版としては、*Corpus Thomisticum* (<http://www.corpusthomicum.org/reoptedi.html>) で最良の版として列挙されているものを使用した。また、トマス・アクィナスの著作年代については基本的に次のものに依拠した：Torrell, J.-P., *Initiation à saint Thomas d'Aquin: Sa personne et son œuvre*, 4 ed., Paris: Les Éditions du Cerf, 2015.

(4) Cf. Thomas Aquinas, *Super Sent.*, I.25.1.1.

(5) Cf. Thomas Aquinas, *Super Sent.*, I.25.1.1, arg. 6. なお、この箇所は『命題集』註解で最初に「個体化の原理」という表現が用いられている箇所でもある。

(6) Cf. Richardus de Sancto-Victore, *De Trinitate*, II.12; IV.22.

(7) Cf. Thomas Aquinas, *Sententia Metaphysicae*, III.13 (n.514).

(8) Cf. Brown, Ch. M., “Aquinas on the Individuation of Non-Living Substances”, *Proceedings of the American Catholic Philosophical Association* 75 (2002): 238; White, K., “Individuation in Aquinas’s *Super Boetium De Trinitate*, Q.4”, *American Catholic*

Philosophical Quarterly 69 (4) (1995): 545; Owens, J., “Thomas Aquinas (b. ca. 1225; d. 1274)”, in *Individuation in Scholasticism*, 173; “Thomas Aquinas: Dimensive Quantity as Individuating Principle”, *Mediaeval Studies* 50 (1988): 301-3.

⁽⁹⁾ Cf. Thomas Aquinas, *Super De Trinitate*, 4, pr.

⁽¹⁰⁾ Boethius, *De Trinitate*, 1.

⁽¹¹⁾ この箇所では、「多様性」、「相異性」、「差異」といった異なる言葉が複数用いられているが、長倉が註記しているように、「ここでは違いを表す類語としてほとんど同じ意味で用いられている」と判断する。Cf. トマス・アクィナス『神秘と学知——『ボエティウス「三位一体論」に寄せて』翻訳と研究』長倉久子＝訳註，創文社，1996，336n1。ただし文脈によっては、「相異性」および「差異」と訳した《diversitas》と《differentia》が厳密に区別されることもある。Cf. Thomas Aquinas, *Contra Gentiles*, I.17 (n.140)。

⁽¹²⁾ Thomas Aquinas, *Super De Trinitate*, 4.2, cor.

⁽¹³⁾ Cf. Boethius, *De Trinitate*, 1.

⁽¹⁴⁾ Thomas Aquinas, *Super De Trinitate*, 4.2, cor.

⁽¹⁵⁾ Thomas Aquinas, *Super De Trinitate*, 4.2, cor.

⁽¹⁶⁾ ただしピーニも強調するように、このことは質料的な事物の形相にのみ当てはまることである。Cf. Pini, G., “The Individuation of Angels from Bonaventure to Duns Scotus”, in *A Companion to Angels in Medieval Philosophy*, ed. T. Hoffmann, Leiden - Boston: Brill, 2012, 89n25.

⁽¹⁷⁾ Cf. Bobik, J., “Dimensions in the Individuation of Bodily Substances”, *Philosophical Studies* (Maynooth) 4 (1954): 66.

⁽¹⁸⁾ Cf. 大鹿一正「個体化の根源に関する一考察——トマス・アクィナスとドゥンス・スコトゥスにおける」『中世思想研究』38 (1996): 6; Bobik, “Dimensions in the Individuation”, 66-71.

⁽¹⁹⁾ Cf. Thomas Aquinas, *Super De Trinitate*, 4.2, cor.

⁽²⁰⁾ Cf. Donati, S., “The Notion of *Dimensiones indeterminatae* in the Commentary Tradition of the *Physics* in the Thirteenth and in the Early Fourteenth Century”, in *The Dynamics of Aristotelian Natural Philosophy from Antiquity to the Seventeenth Century*, ed. C. Leijenhorst, Ch. Lüthy & J. M. M. H. Thijssen, Leiden - Boston - Köln: Brill, 2002, 189-93.

⁽²¹⁾ Cf. Thomas Aquinas, *Super De Trinitate*, 4.2, cor.; トマス『神秘と学知』, 339n39; 大鹿「個体化の根源に関する一考察」, 6-11.

⁽²²⁾ Cf. Thomas Aquinas, *Super De Trinitate*, 4.2, arg. 3.

⁽²³⁾ Thomas Aquinas, *Super De Trinitate*, 4.2, ad 3.

⁽²⁴⁾ Cf. Thomas Aquinas, *Super Sent.*, IV.12.1.1.3, ad 3; *ST*, I^a.29.4, cor.; III^a.77.2, cor.

⁽²⁵⁾ Cf. Brown, “Aquinas on the Individuation”, 239; Wippel, J. F., *The Metaphysical Thought of Thomas Aquinas: From Finite Being to Uncreated Being*, Washington, D. C.: The Catholic University of America Press, 2000, 361; Davies, B., *The Thought of Thomas Aquinas*, Oxford: Oxford University Press, 1992, 49-50.

⁽²⁶⁾ Thomas Aquinas, *Super Sent.*, IV.12.1.1.3, ad 3.

⁽²⁷⁾ Cf. Thomas Aquinas, *Super Sent.*, IV.12.1.1.3.

⁽²⁸⁾ Cf. Thomas Aquinas, *Super Sent.*, IV.12.1.1.3, arg. 3.

⁽²⁹⁾ この点に関して詳しくは次を参照：石田隆太「トマス・アクィナスと天使の個体化——個体化の原理の射程をめぐって」『中世思想研究』59 (2017): 31-45; 『《individuatō》と《principium individuationis》の多様性——トマス・アクィナスによる個の思想の側面』『哲學』(日本哲学会)67 (2016): 159-64.

⁽³⁰⁾ Cf. Thomas Aquinas, *ST*, III^a.77.2, cor.

⁽³¹⁾ なお、トマス思想に限って言えば、個体化の原理の対象領域には質料的な事物のみならず天使や神も含めることができる。さらに言えば、本論では質料的な事物に限って示した個体化の原理という概念の二面性は、同じように天使や神に関しても考慮することができる。ただしそのことの展開は、紙幅の都合により、註29で挙げた文献のほかに、次の文献を参照することで代えることにしたい：石田隆太「トマス・アクィナスによる個の論理——神が個であることの意味をめぐって」『哲学・思想論叢』35 (2017): 18-30.

⁽³²⁾ 註2を見よ。なお、前者はグラシアの理解であり、後者はジオワラの理解である。

※本稿は、JSPS 科研費 17J00136 の助成を受けたものである。

(いしだ・りゅうた 日本学術振興会特別研究員 PD / 慶應義塾大学文学部)